愛知淑徳大学論集―交流文化学部篇― 第８号　2018.３　1-22

『元朝秘史』におけるホエルン夫人の隠された再婚

～繰り返された再婚とその破綻の仮説～

Uncovering the Life of Mother Hö'elün in The *Secret History of the Mongols*: A Hypothesis of Repeated Remarriage and its Collapse

藤井　真湖
Mako Fujii

Abstract

Hö'elün, mother of Genghis Kahn (Chinggis Khan), is one of the figures described as lively in the great epic, The *Secret History of the Mongols* which describes the earliest period of the Mongol Empire. Her peculiar fate is drawn explicitly, but there is no mention at all of her remarriage after her husband Yisügei, father of Genghis Khan, was poisoned. In this paper, I would like to submit a hypothesis that she remarried a man named Münglig of the Qongqotan group, a hypothesis that will help us to understand logically the events that took place after Yisügei's death, that have until now been considered incomprehensible.

This remarriage that is thought to have taken place soon after the death of Yisügei, however, did not last long. Interestingly, Münglig of the Qongqotan group is thought to have worked hard as an intelligence agent for the Hö'elün family, even after his divorce from Hö'elün. Then when the time was ripe, Hö'elün is considered to have married Münglig again.

Hö'elün remarried for the second time with Münglig and the celebration was held, implicitly. Later, the sons of Münglig, mainly Teb Tenggeri, gained political power, explicitly. But the relationship was not good between Teb Tenggeri and the sons of Hö'elün, Qasal (the younger brother just below Genghis Khan) and Temüge Otčigin (the youngest brother of Genghis Khan). In a conflict that ended up involving Genghis, Genghis had no choice but to allow Temüge Otčigin to kill Teb Tenggeri, as intended by Otčigin. It is believed that this incident was sufficient to end the marriage between Hö'elün and Münglig.

はじめに―本論の概要―

チンギス・ハーンの実母ホエルン夫人はモンゴル帝国の草創期を記す一大叙事詩である『元朝秘史』（以下、秘史）において活き活きと描かれている人物のひとりであるが、彼女の夫イェスゲイ―チンギス・ハーンの父―が毒殺された後に再婚したことについては一切触れられてい

ない。本論では、彼女がコンゴタン集団のムンリクという人物と再婚したという仮説を提示し、この仮説を取り入れると、イェスゲイ亡き後の秘史の叙述における幾つかの不可解な事柄を理解することができることを示す。ただし、イェスゲイ亡き後まもなく行われたと考えられる再婚は長く続かず、一旦は破棄されたと考えられる。興味深いことに、コンゴタン集団のムンリクは、ホエルンとは別れたものの、その後もホエルン一家のために尽力していたと考えられる。その後、ホエルンは、時機が到来したと考えられる時点で、再びムンリクと婚姻関係を結んだと考えられる。ホエルンはムンリクと再々婚をし、祝宴も挙げられた（非明示的内容）。

この再々婚によって、ムンリク自身の息子たちーとくにテブ・テンゲリを中心とする息子たちーは、政治的な権力を握るようになる（明示的内容）。しかし、テブ・テンゲリたちと、ホエルンの息子たちであるカサル（チンギス・ハーンのすぐ下の弟）やオドチギン（チンギス・ハーンの末弟）との関係性は良好なものではなかった。最終的に、チンギスを巻き込むことになったある対立において、チンギスはオドチギンの意向を受け入れ、テブ・テンゲリの殺害を許可せざるを得なくなる。この事件によって、ホエルンとムンリクの再々婚は終わりを告げたと推測される。

１．本論の目的と方法論、そして議論の流れ

１．１．本論の目的

筆者はこれまで『元朝秘史』を歴史文学作品と見なし幾つかの考察をおこなってきた（藤井 2009，2010a，2010b，2011a，2011b，2013a，2013b，2013c， 2014a, 2014b,2015, 2016）（注１）。これらの諸考察と同様に、本論の目的は、秘史の内在的な論理を明らかにすることである。本論においても、表題に示したように、チンギス・ハーンの母ホエルン夫人が夫イェスゲイ・バアトルの死後に再婚したという仮説を立てることで、この内在的論理をさらに明らかにすることを目的とする。

ここで問題となるのは、チンギスの実母ホエルンが夫イェスゲイの死後にコンゴタン集団のムンリクと再婚したという内容は明示的には示されていないということである。しかし、ホエルンがムンリクと再婚したという仮説を立てると、イェスゲイの死後の叙述における不可解な点を理解できるようになる。さらに、イェスゲイ死後の叙述を超えた叙述範囲まで広げると、この再婚は長く続かず、一旦破棄され、その後また再婚し、最終的に破綻したものと推測される。

本論では以上のように、ホエルンの再婚とその破たんは二度繰り返されたという仮説を提示し、この仮説を受け入れると、秘史の明示的な内容における不可解な点を理解できるようになることを具体的に提示することしたい。この仮説は事実上Ⓐ再婚、Ⓑ再婚の破綻、Ⓒ再々婚、Ⓓ再々婚の破綻、という４つに分節しうるので、考察においては、ひとつの結婚とその破綻をひとまとまりの出来事として捉えて議論する。すなわち、ⒶとⒷとをひとつのまとまり、そして、ⒸとⒹとをもうひとつのまとまりとして扱う。そして、それぞれの仮説に関連する秘史の

叙述箇所における不可解な点を列挙し、仮説を受け入れればその不可解さが解明されることを示したい。

１．２．対象テキストおよび方法論

本論においては、秘史の考察のテキストとして、転写については栗林均・确精扎布（編）『元朝秘史』モンゴル語全単語・語尾索引』（2001 年）、訳語については四部叢刊本を基にした小澤茂男『元朝秘史全釈』3 巻及び『元朝秘史全釈続攷』3 巻（1984～1989 年）に依拠したことを断っておく。ただし、訳語については、日本語として意味が取りにくいさいには、若干表現を変えたことを断わっておく。

方法論としては、秘史の対象箇所における不可解な点を指摘し、それがホエルンの再婚にまつわる仮説を取り入れると読み解かれることを示す。これによって、最初の仮説が妥当なものであったことを論証するという仮定的推論法（abduction）の方法をとることにしたい（注 2）。そのうえで、筆者が拙論で論じてきた考察を議論に組みいれ、秘史の非明示的内容のさらなる解明を目指すことにしたい。

１．３．議論の流れ

１．１．で述べた目的のためには、以下のような手順が必要となる。すなわち、仮説に関連する秘史の明示的な流れを確認、次に、その箇所における不可解な点の指摘、そして仮説を受け入れるとその不可解な点が解消することを提示することの３つの作業である。その場合に、明示的な内容の確認とその箇所に関連する考察の位置が離れるとわかりにくいので、Ⓐ とⒷとを一つのまとまり、Ⓒ とⒹとをひとつのまとまりとして分けて、この３つの作業を順番に行うことにする。具体的に言えば、次のような順で議論を進めることにしたい。すなわち、Ⓐ とⒷの考察を２．に、Ⓒ とⒹの考察を３．に分けて、それぞれ、1）明示的な流れの確認、2）不可解な内容の指摘、3）それぞれの下位仮説を受け入れれば不可解な点を理解できるようになることの詳細な提示、という作業を順次おこなう。最後に、４．においては結論と今後の課題に触れる。

２．１回目の再婚Ⓐとその破綻Ⓑについての考察

２．１．１回目の再婚Ⓐの考察

２．１．１．ホエルンの再婚Ⓐに関わる明示的な流れの確認

ホエルンの再婚に関わる内容としては、巻１§68～巻２§75 あたりまでが該当箇所となる。以下、この８つの節の概要を表１としてまとめてみた。内容の提示の仕方として、内容別に①、②というように数字を用いてわかりやすくした。また、補足が必要と思われる場合には、※をつけて説明した（2 つ以上ある場合は※の後に数字を付しておいた）。本論における他の表においても以下同様とする。

表１　ホエルンの再婚に関わる巻１§68～巻２§75 の各節における内容の概要

該当箇所	内容
巻１§68	イェスゲイの死が叙述されている箇所。遺言としてムンリクに①ホンギラト集団に婿として残してきたチンギスを連れ戻すことと、②子供たちとホエルンの世話をすること、の２つを依頼する。
§２§69	ムンリクがイェスゲイの遺言の①のことを実行し、チンギスを連れ戻してくる。 ※ここで、ムンリクがはじめて“ムンリク父”（ムンリク・エチゲ）と呼ばれている。
〃　§70	①アムバガイ・ハーンの妃たち２人がホエルン夫人を祖先祭祀から排除しようとしたこと、また②それに対するホエルンの彼女たちへの抗議。
〃　§71	§70 のホエルンの抗議に対するアムバガイ・ハーンの妃たちの抗議。
〃　§72	タイチウド集団がホエルン一家を見捨てるときに、チャラカ老人（ムンリクの父）が制止しようとするが、かえって背中を槍で刺されて負傷するという内容。 ※１チャラカ老人がムンリクの父であることは、§68 ですでに言及されている。 ※２当該節は「策を弄して、この母子たちを牧営地に置き去りしなさい」と言う文章から始まっているが、誰が発言したものかは不明である。とはいえ、明示的には§70 と§71 からの流れで、アムバガイ・ハーンの未亡人たちの発言であるように読ませているといえる。
〃　§73	①チンギスがチャラカ老人のもとに行き泣いて出ていったこと、②ホエルンは旗を持って自ら馬に乗り、③いくらかの属民を戻らせたこと、そして④もどされた属民は落ち着かずタイチウド集団の後を追って移動したという内容。
〃　§74	タイチウド集団に去られた後、ホエルン夫人は自分の子供たちを女手一つで育てたという内容。
〃　§75	ホエルン夫人の幼い子供たちが立派な若者に成長したという内容。※§74 と§75 は類似した内容に見えるが、よく見ると、前者においては、ホエルンが幼い子供たちを育てる立場になっているのに対して、後者においては、子供たちが母孝行をする立場に逆転したことが示されている。

表１§６８の②は本論を始めるにあたり重要な事柄であるので、原文と訳文を示しておく。つまり、ホエルンがムンリクと再婚することをイェスゲイは遺言として残していたのかどうかという点が焦点となる。表１においては、イェスゲイはムンリクにホエルンと子供たちを頼んだとあるが、これについては補足が必要である。小澤重男氏はこの箇所の転写及び訳語を次のようにしている。

§68　…　üčüged qočoruγsad de’ü-ner-iyen belbisün bergen-iyen asaraqu-yi či mede, kö’ün minu.
…（略）…**幼く残った自分の弟たちを、自分の寡婦たる兄嫁を世話することを、お前がとりしきれ、我が子ムンリクよ**」と言って亡くなった（ゴシック体筆者）。

そして、小澤氏はさらに次のような説明を加えている（小澤　1984：279）。

üčüged を≪小さきもの達ーすなわち子供達≫と解することもできないことではない。しかし、-iyen《自分の~を》が de’ü-ner と belbisün bergen との次に見られ、üčüged の次には置かれていないので、このような訳文とした。

小澤氏のこの説明に基づくと、イェスゲイは明確に子供達たちやホエルンのことをムンリク

に依頼しているわけではないことになる。しかし、イェスゲイは、自分の実の子供ではないムンリクを「わが子ムンリク」と言っているように、ここで言及される親族名称をそのままに受け取ることはできない。こうした用法は現在のモンゴルの日常生活においても見受けられるからである。指摘すべきは、遺言のさいに、あえてイェスゲイ自身の妻子を除外して、イェスゲイの弟たちや寡婦たる兄嫁の世話を頼むというのは不自然のように思われることである。

それゆえ、「我が子ムンリクよ」の部分は慣用句的な表現として除外し、イェスゲイの言葉を、ここでは、ムンリクの立場からみて、イェスゲイは兄的存在なのでホエルンは兄嫁的存在となり、子供たちはムンリクよりも少し年下なので弟的存在になると考えることにしておく。つまり、本論では、原文の再帰格《自分の〜を》をイェスゲイの立場からではなく、ムンリクの立場から言ったものだと解釈し、イェスゲイはホエルンと子供たちをムンリクに託したのだと考えることにしたい。

ホエルンがムンリクと再婚したという仮説を先取りするなら、なぜこうした書き方がなされたのかを推測することができる。すなわち、このような書き方をすることによって、ムンリクの年齢のおおよそを伝えたかったのではないかと思われる。つまり、イェスゲイよりもかなり下であるが、イェスゲイの子供たちよりもずっと上だということ、つまりホエルンと婚姻が結べるような年齢だったということである。

２．１．２．ホエルンの再婚Ⓐに関連する叙述における不可解な点

ホエルンの再婚Ⓐに関連する叙述における不可解な点を一括して示すと、表２となる。不可解な叙述というわけではないが、巻２§73 のチンギスの行動は、チンギス・ハーンの前半生における諸事件の非明示的内容とはやや違和感を覚えるものとなっている。これについては、以下の考察のなかでも、実はそれまで示してきた人物像と一致することを示すことになる。

表２　ホエルンの再婚Ⓐに関連する叙述における不可解な点

叙述順	不可解な点	関連箇所
A①	イェスゲイは§68 でコンゴタン集団のムンリクに自分の死後、自分の幼い子供たちと妻ホエルンを世話するように頼んでいるにも関わらず、ムンリクがそのようなことをしたという叙述が一切ないこと。※これ以降の秘史の叙述にもこのことには言及されない。	§68
A②	当該節にはムンリクの名前に２度触れられているが、２度目には、“ムンリク父”（ムンリク・エチゲ）と呼ばれていること。	§69
A③	イェスゲイの死後、ホエルンが祖先祭祀から排除されそうになったように叙述されていること。	§70
A④	A③の祖先祭祀において、アムバガイ・ハーンの未亡人２人が主張していることは、ホエルンと同じ内容であるにも関わらず、口論となっていること。	§70〜§71
A⑤	タイチウド集団（アムバガイ・ハーンの系譜の集団）が、幼き子供たちを抱えるイェスゲイの未亡人一家を親せき集団であるにもかかわらず捨てていること。	§72
A⑥	タイチウド集団が去るときに、コンゴタン集団のチャラカ老人（ムンリクの父）が唐突に出現して、イェスゲイの属民の離反を阻止しようとしていること。	§72
A⑦	タイチウド集団だけでなく、そのときにイェスゲイの属民もホエルン一家を捨て、タイチウ	§72〜§73

	ド集団に一緒についていったこと。	

表２に挙げた７点は、ホエルンがムンリクとイェスゲイの死後に再婚していたとすれば、すべて説明がつく。これについて、以下、詳しく述べることにする。

２．１．３．仮説を適用した場合

以下、仮説を用いると表２の A①～A⑦を理解できるようになる。適宜、表１も参照されたい。

●A①の場合

イェスゲイは§68 でコンゴタン集団のムンリクに自分の死後、自分の幼い子供たちと妻ホエルンを世話するように頼んでいるにも関わらず、ムンリクがそのようなことをしたという叙述は一切ない。

しかし、当該節に後続する§69 においては、表中にも若干説明を加えたように、ムンリクの名前は２度触れられており、**最初は“ムンリク”（Mönglik）とのみ書かれているが、２度目に現れるときには、この名前に“父”(ečige)という語が付加されて、“ムンリク父”(Mönglik ečige)となっている。**このことは注目される。なぜなら、“ムンリク父”という表現は、ホエルンが再婚したという仮説をうかがわせているからである。それと同時に、その再婚がこの時期であったことを示しているといえる。

●A②の場合

これについては、前述の A①で同時に触れたことになる。すなわち、ホエルンがムンリクと再婚したという仮説をそのまま適用することができる。

●A③の場合

イェスゲイの死後、ホエルンが祖先祭祀から排除されそうになったように叙述されているのは、彼女がムンリクと再婚したことを前提にすれば、理解できるものとなる。父系社会におけるモンゴルでは、女性が再婚して別の男性に嫁ぐと、その男性の集団に属する成員として見做されることになるからである。

●A④の場合

A③の祖先祭祀において（§70～§71)、アムバガイ・ハーンの未亡人２人は自分の夫アムバガイが死んだからといってホエルンから言いがかりをつけられるようになったという趣旨のことを言っている。一方、ホエルンは、これに対して、夫イェスゲイが死んだからといってアムバガイ・ハーンの未亡人たちに排除されるようになったと言っている。両者の言い分をみると、

どちらも「夫が死んだら妻の地位が下がるのか？そうであってはならないはずだ」ということを言おうとしたものであることが理解される。すなわち、表面上は口論であるが、両者の主張はよく見ると、同じ趣旨のことを言っている。

にもかかわらず対立しているという点があるとすれば、ホエルンの再婚という仮説以外にはないように思われる。アムバガイの妻たちはホエルンが再婚したにもかかわらず、祖先祭祀に参加しようとしていることを承服しかねたのだと考えれば納得がいく。

●A⑤の場合

ホエルンがコンゴタン集団のムンリクと再婚したという仮説を受け入れれば、タイチウド集団が、幼き子供たちを抱えるイェスゲイの未亡人一家を親せき集団であるにもかかわらず捨てていることは説明がつく。前述のように、ホエルンが再婚した時点で、父系制であるモンゴル社会において、女性ーここではホエルンーは、夫ーここではイェスゲイーが死んでしまえば夫の集団とは無関係な存在となるからである。むろん、イェスゲイの子供たちはイェスゲイの集団の成員ではある。しかし、幼かったためにホエルンに属する者たちの数に入れられる傾向がある上に、その母のホエルンが別の男性と再婚したということであれば、ホエルン一家がイェスゲイ一族とは認められなくなったという可能性が充分に考えられるのである。

●A⑥の場合

ホエルンが再婚したという仮説を受け入れると、タイチウド集団が去るときに、コンゴタン集団のチャラカ老人（ムンリクの父）が唐突に出現して、イェスゲイの属民の離反を阻止しようとしていることが理解される。なぜなら、チャラカ老人はムンリクの父であるので、チャラカ老人はホエルンにとって義父となるからである。それゆえ、集団の離反に直面して、義父が前面に出ていったことは驚くには当たらない。

確かに、このチャラカについては、“老人”（ebügen）と叙述されており、高齢であったように読めるが、ムンリクの年齢が前述のようなものであるとすると、ムンリクの父親の年齢は老人というほど年齢が高くなかった可能性がある。ここで、“老人”を意味する言語の“エブゲン”（ebügen）には“老人”以外に、“祖父”という意味もあるからである。つまり、ここでは、ムンリクとの世代的差を示すために、チャラカを“エブゲン”（祖父の意の ebügen）、ムンリクを“エチゲ”（父を表わす意の ečige）と表現している可能性がある。

チャラカはタイチウドのひとりに負傷させられたとはいえ、集団の分裂のさいに敢然と立ち向かっていることをみても、当時の集団の実質的なリーダー的存在であった可能性がある。つまり、イェスゲイの死後、チャラカ老人は、息子ムンリクと再婚したホエルン一家を統率していた長とすれば、彼の唐突な出現に説明がつく。

●A⑦の場合

ホエルンがムンリクと再婚したとすると、イェスゲイの属民も、イェスゲイだから従っていたわけであって、イェスゲイの家臣であったと思われるムンリクの支配下に入るつもりはなかったのだと想像される。タイチウド集団（アムバガイ・ハーンの系譜の集団）だけでなく、そのときにイェスゲイの属民もホエルン一家を捨て彼らに一緒についていったのは、そうした事情からであろう。タイチウド集団についていったイェスゲイ属民たちはその後ジャムカ陣営に入り、ゆるやかにケレイト集団の支配下にあったことについては拙論ですでに述べたとおりである（藤井　2014：55－56）。

以上のように、ホエルンがイェスゲイの死後、ムンリクと再婚したという仮説を取り入れると、§68～§73 における不可解な点を理解することができる。

２．２．ホエルンの再婚の破綻Ⓑの仮説の考察

２．２．１．ホエルンの再婚の破綻Ⓑに関連する箇所

ホエルンの再婚が破綻したことに関わる内容は§73～§74 で叙述されている。とくに§73 は、ホエルン一家に劇的なことが起こった事件として重要なので、この部分について、下記に原文と訳を示しておく（栗林均・确精扎布　2001：58，小澤　1985：32－33）。

§73　Čaraqa_ebügen yaratu bol=ǰu ger-tür-iyen ire=jü berke kebde=küi-tür Temüǰin üǰe=re ot=ču'u. tende Qongqotadai Čaraqa_ebügen ügüle=rün ≪sayin ečige-yin čin=u guriyaqda=qsan ulus-i man-u bürin-ü ulus a[b]=ču newükde=rün itqa=qu bol=u=n eyin kikde=be. ≫ kēǰü'ü. te'ün-tür Temüǰin uyyila'at qar=ču yorči=ba. Hö'elün_üǰin gēǰü newükde=rün tuqla=ǰu beye-ber morila=ǰu ǰarimut irgen-i ičuqa=ba. tede ber ičuqaqda=qsan irgen ülü toqta=n Tayyiǰi'ud-un qoyina-ča newü=jü'üi.

チャラカ老人は傷ついて、自分のゲルに帰ってきて、苦しく臥している時、テムジン（チンギス・ハーンの幼名―注筆者）は見舞いに行った。そこで、コンゴタン氏のチャラカ老人の言うのに、「立派な汝の父上の集められた我々の民草を連れて移られるときに、留めることになって、このようにされた」と言った。それでテムジンは泣いて出て去った。ホエルン夫人は棄てて移られる時に旗幟をたて、みずから馬にのり、いくらかの人々を取り戻した。彼ら取り戻された人々は安定せず、タイチウドの後について移動した。

当該§73～§74 の主要な要約を叙述順に述べておくと以下のようになる。

表３　ホエルンの再婚の破綻に関わる§73～§74 における内容

	内容	該当箇所
①	負傷したチャラカ老人をチンギスが見舞う	巻２§73
②	チャラカ老人が、イェスゲイ属民が去ったことを告げる	〃
③	チンギスがこれを聞いて、泣きながら出ていく。	〃
④	ホエルン夫人は旗幟をたて、自ら馬に乗り、属民の一部を取り戻す。	〃

⑤	ホエルン夫人が取り戻したイェスゲイの属民は落ち着かずタイチウドについていく。	〃
⑥	ホエルン夫人が女手一つで子供たちを育てたという記述	巻２§74

２．２．２．ホエルンの再婚の破綻Ⓑに関連する叙述における不可解な点

ホエルンの再婚の破綻Ⓑに関連する叙述における不可解な点を一括して示すと、表４となる。

表４　ホエルンの再婚の破綻Ⓑに関連する叙述§73～§74における不可解な点

叙述順	不可解な点	関連箇所
B①	属民を引き戻すためにホエルンが旗幟を自ら持っていたこと。	表３の④
B②	ホエルンがいくらかの属民を連れ戻したのにその属民が落ち着かず離れていったこと。	表３の⑤
B③	再婚したはずのホエルンが、女手一つで子供たちを育てたということ。	表３の⑥

以上に挙げた３点は、ホエルンがムンリクと一旦婚姻を破棄したとすれば、すべて説明がつく。これについて、以下、詳しく述べることにする。

２．２．３．ホエルンの再婚が破綻したという仮説Ⓑを適用した場合

以下、仮説を用いると表４の B①～B③を理解できるようになることを示す。適宜、表３も参照されたい。

●B①の場合、

ホエルンがムンリクと再婚したものの、属民の離反を目の当たりにして、ホエルンがこの再婚を取りやめたという仮説を受け入れると説明がつく。つまり、旗幟というのは集団の象徴であり、この旗幟をホエルンが持っているということからみて、ホエルンは、“ムンリク夫人”ではなく“イェスゲイ夫人”としての立場を示そうとしたものだと考えられる。

●B②の場合

ホエルンが再婚を破棄したという仮説に基づくと、ホエルンがいくらかの属民を連れ戻したことが説明できるようになる。そして、同時に、この仮説を取り入れると、その属民が落ち着かず離れていったことも説明がつく。つまり、ホエルン夫人のもとに戻ってきたものの、ホエルンの再婚破棄を単なる“属民戻しのための方便”と受けった人が多かったからではないかと考えられる。

●B③の場合

ホエルンが再婚を破棄したという仮説に基づくと、ホエルンが女手一つで子供たちを育てたという叙述は納得できるものとなる。

以上のように、ホエルンの再婚が破たんしたという仮説に基づくと、３つの不可解な点を説明しうる。

２．２．４．ホエルンは再婚をいつ破棄したのかについての補足

ところで、ホエルンはムンリクとの再婚をいつ破棄したといえるのであろうか。これについては、チャラカ老人が負傷して臥せっているところに会いにいったチンギスがチャラカ老人の話を聞き泣いて出ていったという叙述のすぐ後であるように思われるーすなわち表３の③の後であるー。この叙述のあとに、上記のホエルン夫人がイェスゲイ未亡人として旗幟をもって属民たちを引き戻そうとしているからである（表３の④）。

この流れをみると、チンギスの行為は、表面的には現実の厳しさに泣いている他愛無い子供のように振る舞っているように見えるが、彼の行動についての叙述が“チャラカ老人の負傷”と“ホエルンのイェスゲイ夫人としての行動”との間に位置していることからみて、チンギスは母ホエルンの再婚に異を唱えた可能性がある。母の再婚によりイェスゲイ属民を失うという事態を目の当たりにして、ムンリクとの再婚は自分自身の将来をつぶすものであるとチンギスは見なしたのではなかろうか。

３．再々婚Ⓒとその破綻Ⓓについての考察

３．１．再々婚Ⓒの考察

３．１．１．ホエルンの再々婚Ⓒに関連する秘史の明示的箇所

次に、巻２§73 でホエルンはムンリクとの再婚を一旦破棄したものと思われるが、再度ムンリクと再婚したと考えられる。この再々婚の事情に関わる節を表示すると次の表５になる。

表５　ホエルンの再々婚に関連すると考えられる９つの節における主要な内容

	該当箇所	内容
1	巻４§130	①チンギス陣営とジャムカ陣営との戦いでチンギス陣営は負けたものの、多くの人々がチンギス陣営に流れ込んでくる。そうした人物としてムンリクとその 7 人の息子たちが一番最後に挙げられている。②チンギスはジャムカ陣営からこれほど多くの人が来たと喜び、チンギスは、ホエルン夫人、カサル、ジュルキン集団のサチャ・ベキ、タイチュとともにオナン河の森で宴を行うことを提案する。③この宴会において酒の給仕担当であったシキウルという人物はサチャ・ベキの父の正妻たちよりも側室であるサチャ・ベキの庶母に酒を先に給仕したとしてサチャ・ベキの父の正妻たちに打ち据えられる。この仕打ちに対してシキウルは、イェスゲイやその兄ネクン・タイシがいれば、このようなことにはならなかったと号泣する。
2	〃　§131	①上記の宴会においてはまた、チンギスの異母弟ベルグテイがジュルキン集団陣営にいたブリ・ボコに肩をきりつけられる事件がおこる。②チンギスはこの刺傷事件を一大事件にしようとするがベルグテイはチンギスを諌める。
3	〃　§132	宴会の叙述の続き。①チンギスはベルグテイの諌めにもかかわらず、ジュルキン集団の正妻たちを奪う。しかしジュルキン集団の乞いによって彼女たちを返す。②その宴会の途中に、チンギスに金朝から対タタル戦に参加するようにという要請が舞い込む。
4	〃§133	①チンギスは金朝の要請を受けて、ケレイト集団の王罕に一緒に戦うように遣いを出

		し、王罕はこれに応じる。②チンギスはジュルキン集団にもこの対タタル戦に出陣するように命じるが、ジュルキン集団は来ず、チンギスと王罕の陣営だけで戦う。
	§134〜§167	
5	巻5§168	①王罕の息子センゲムがチンギスに、チンギスの長男ジョチとセンゲムの妹チャルル・ベキとの婚姻を承諾し、婚姻の食事を食べにくるように誘う。チンギスはこの途上でムンリク父の家に泊まる。②ムンリク父はその誘いがセンゲムの姦計であると忠言する。③チンギスはムンリクの忠言を受け入れ、そのまま引き返す。※この事件がきっかけでチンギスと王罕の友好関係は決定的に終わることになる。
	§169〜§201	
6	巻8§202	チンギスの千戸長の名前の筆頭にムンリク父の名前が挙げられる。
	§203	
7	〃 §204	巻5§168におけるムンリクの忠言によって命拾いしたことについて、チンギスのムンリクへの感謝が述べられている。
	§205〜243	
8	巻10§244	①コンゴタン集団のムンリク父には 7 人の息子がいたという叙述から始まり、その中でも真ん中のココチュがテブ・テンゲリ（天つ神）と呼ばれていたこと、②チンギスの同母弟カサルがテブ・テンゲリら 7 人に打たれ、チンギスに苦情を言いに行くが、チンギスは取り合わなかったこと、③カサルがその後 3 日間チンギスに会いにいかなかったこと、④テブ・テンゲリがチンギスでなければ、カサルが政権をとってもよいという神託があり、カサルを放っておくことの危険性をチンギスに告げたこと、⑤チンギスがこの言を真に受けて、カサルを捕縛しに行ったこと、⑥この事件をホエルンが知り、チンギスのもとに行くと、すでにカサルが捕縛され詰問されていた最中であったこと、⑦ホエルンは自らの乳房を出して、彼らがこの乳房を吸った実の子供たちであることを示し、カサルを擁護してチンギスの行為を制止したこと、等が叙述されている。
9	〃§245の前半部分	①テブ・テンゲリのもとに多くの人々が集まるようになっていったこと、②チンギスの同母弟オドチギンに属する人々がテブ・テンゲリのもとに流れたこと、③オドチギンは使者を遣わしこの人々を取り戻そうとしたが、使者を打たれた上に鞍を背負わせて徒歩で帰らせられたこと、④オドチギンはテブ・テンゲリのもとに直接抗議しにいくが、7人に威圧され、使者を送ったのはオドチギンの非として、オドチギンがテブ・テンゲリに膝まずかせられたこと、⑤オドチギンはこの事件をチンギスのもとに訴えにいくと、ボルテ夫人がコンゴタン集団を非難し、コンゴタン集団を放っておくと自分の息子たちがどうなるかわからないとチンギスに諫言したこと、⑥ボルテ夫人の言葉に促され、チンギスはオドチギンに、間もなくチンギスのもとに来ることになっているテブ・テンゲリをどうするかを任せると言ったこと、等が当該節の前半部分で叙述されている。

３．１．２．ホエルンの再々婚Ⓒにおける不可解な点

ホエルンの再々婚に関わる秘史の箇所には、幾つかの不可解な点が認められる。それらをまとめると、表６になる。

表６　ホエルンの再々婚に関連する叙述箇所における不可解な点

叙述順	不可解な点	関連箇所
C①	巻１の§68 でイェスゲイは遺言においてムンリクに自分の子供たちとホエルンの世話を依頼していたにも関わらず、それを果たした形跡のないムンリクが出現しているにも関わらず、ムンリクに対して咎めが一切ないこと。	表５の１の①
C②	宴会はチンギス一家とジュルキン集団との親睦のための酒宴に見せかけているが、すでにジュルキン集団のサチャ・ベキとタイチュはチンギスに降っているので、この宴会をこの時点	表５の１

	でおこなう必要がとくにないこと。	の②
C③	シキウルが、酒の注ぎ方の順序を誤ったとして打たれたときに、とうの昔に亡くなったイェスゲイやその兄のネクン・タイシに言及していること。	表５の１の③
C④	チンギスが、センゲムの妹を長子ジョチに娶らせるためにセンゲムのところへ行く途上で、ムンリクのところに寄っていること。	表５の５の①
C⑤	ムンリクが、センゲムの妹との婚姻が罠であるというような立ち入ったことをチンギスに忠告していること（一介の家臣の発言の範囲を逸脱していること）	表５の５の②
C⑥	チンギスがムンリクの忠告に異を唱えもせず、従ったこと。	表５の５の③
C⑦	ムンリク一家がなぜかチンギスの弟たちと争うほどに権力を握っていること。具体的に、ひとつには、ムンリクの息子がカサルを讒言しているのをチンギスが信じてカサルを捕縛していること。	表５の８の④と⑤
C⑧	C⑦と同様に、ここでもムンリク一家がチンギスの弟たちと争うほどに権力を握っていること。具体的に、オドチギンがムンリク一家によって「恥辱」を受けたにもかかわらず、チンギスがテブ・テンゲリを処罰することに消極的であったこと（チンギスが処罰をすることはボルテ夫人に促されたためであるように描かれている）。	表５の９の⑤と⑥

３．１．３．ホエルンの再々婚という仮説を適用した場合

以上に挙げた８点の不可解な点は、ホエルンがムンリクと再々婚をしたという仮説Ⓒを受け入れると説明がつく。以下、それについて示す。

●C①の場合

これに関連する箇所（巻４§130）は重要なので、冒頭部分を原文から引用し訳出しておきたい（栗林均・确精扎布 2001：160, 小澤　1986：21）。

tende Jamuqa-yi tende-če qari’ul=u=at　Uru’ud-un Jürčedei Uru’ud-iyan udurid=u=at Mangqud-un Quyuldar Mangqud-iyan udurid=u=at Jamuqa-dača qaqača=ju Činggis_qahan-tur ire=bei. Qongqotadai **Mönglik_ečige** tende Jamuqa-tur a=ju **Mönglik_ečige** dolo’an kö’üt-lü’e-ben Jamuqa-dača qaqača=ju tende Činggis_qahan-tur neyile=n ire=bei.

そして、ジャムカをそこから帰らせてから、ウルウド集団のジュルチェデイがウルウド集団を引き連れて、マングト集団のクユルダルがマングト集団を引き連れてジャムカのもとから離れてチンギス・カハンのもとに来た。コンゴタン集団の**ムンリク父**は、そこにジャムカのところに居て、**ムンリク父**は７人の子供たちとともにジャムカのところから離れて、そこにチンギス・カハンのところに合流して来た[ただしゴシック体は筆者による]。

仮説Ⓒを直接取り入れても、この部分は説明しにくいので、下記のような状況説明が必要で

あるように思われる。

この§130 の直前の§129 では、ジャムカとチンギスの間におこったダラン・バルジュトの戦いが記されている。この戦いにおいては、チンギスはジャムカとの戦いに敗れたにもかかわらず、ジャムカの側にいた多くの人々がチンギスに流れてきている。このときに、チンギスに流れてきた人物の 1 人としてムンリク父に言及されている。ここでは単にムンリクではなく、“ムンリク父”となっていることに注意したい。重要なのは、この§130 においてムンリクとその 7 人の息子たちと一緒にチンギス陣営に来た人物として、ウルウド集団のジュルチェディとマングト集団のクユルダルという人物に言及されていることである。

なぜなら、拙論で論じたように、このふたりは対にして言及されることが多いが、ジュルチェディとは異なり、クユルダルのほうは、対ケレイト最終戦において、チンギスと覇を競おうとした人物であるーすなわちチンギスとハーン位を争っていた可能性もあったーからである（藤井 2014 : 65－68）。つまり、ムンリクはジャムカ陣営にいたあいだに、ジャムカの動向とともに、このクユルダルの動向について諜報活動をしてチンギス一家に報告していた可能性が浮上する。そして、クユルダルがジャムカ陣営から離れた理由には、拙論で論じたように、チンギスがひそかに金朝の配下に入ったことと関連がある（藤井 2016 : 12）。つまり、金朝下に入ったことによりチンギス一家は一時といえども政治的には安定したといえるのである。

以上に挙げた、“ムンリクへの非難の皆無”と“ムンリクと同時期のクユルダルのチンギス陣営への移動”の 2 点は、ムンリクが巻 1 の§73 でホエルンとの婚姻を解消した後もーあくまで非明示的にではあるがー、ホエルン一家のために尽力していた可能性を示唆している。それゆえ、ホエルン夫人は、一旦は解消したムンリクと再々婚したのだと考えられる。

●C②の場合

仮説Ⓒを受け入れると、ムンリクのジャムカ陣営からチンギス陣営への合流は巻 4 の§130 で、直後の§131 に宴会がおこなわれていることを見ると、明示的には一切書かれていないが、この宴会はホエルンとムンリクの結婚式の酒宴と考えるのが妥当である。拙論においては、この酒宴をブリ・ボコ事件の一環として位置づけ、チンギスが画策したとはいえ、チンギス陣営とジュルキン陣営の政争という観点からのみ捉えていたが（藤井　2016 : 2－20）、本論で論じるように、このブリ・ボコ事件の大きな核でもあるこの酒宴がさらにホエルンの結婚式であったという非明示的な内容が織り込まれていたということになる。

実際、改めて結婚式の酒宴という観点からみたとき、たしかに、この§131 においてチンギスはジュルキン陣営との宴会をこの時点でおこなう意味はあまりないことに気づく。なぜなら、ジュルキン陣営のサチャ・ベキとタイチュは巻 3 §122 においてはチンギス陣営に帰順していたからであるーこのことは明示的に述べられているー。やはり、前述のように、ここで注目すべきことは、当該節の直前の§130 において、クユルダルという人物がチンギス陣営にジャムカ陣営から合流してきていることである。

クユルダルについては重要なので繰り返すと、クユルダルは明示的にはチンギスに忠誠を尽くした勇将のように叙述されているが、非明示的には、チンギスのライバルで、対ケレイト戦においては、チンギスと覇権を争った人物であったと考えられる（藤井 2014a：65－69）。つまり、クユルダルは要注意人物であり、そうした要注意人物と一緒にムンリクとその７人の息子たちがチンギス陣営に移動してきたということである。前述のように、敵陣のジャムカ陣営から移動してきたムンリク親子をチンギスが罰したというような叙述は一切ないことを見ると、ムンリクはホエルンと最初の婚姻関係が破綻して以降もホエルン一家のために、敵陣で諜報活動をしていたという前述の推測が生まれる。実際、イェスゲイが亡くなるときにムンリクがイェスゲイの傍にいて密命を受けたことも、この推測を裏付ける。

§130 の宴会が婚姻の祝宴であったことは、別の点でもうかがわれる。どのような人間が参加していたかという点から見た場合、当該節で、酒宴の代表的人物として、チンギス陣営から 3 人の名前が挙げられているが、それらはチンギス、ホエルン夫人、そしてカサルだからである。つまり、ホエルン夫人がチンギスの次に挙げられている点で、この宴会がホエルン夫人と関連するものであることをうかがわせているのである。そして、チンギスの弟カサルが３番目に挙げられていることは、チンギス陣営を代表しているのがチンギスとカサルの２人だということを示しており、巻 10 の§244 においてテブがチンギスのライバルとしてカサルを挙げる伏線となっているともいえる。

以上のように、ホエルンとムンリクは、かつてタイチウド集団の離反を避けるためにやむなく婚姻を解消せざるを得なかったが、すでにタイチウド集団は滅ぼされ、ムンリクが再登場していることからみて、この時点での宴会は、婚姻のための酒宴と考えるのが妥当であろう。ただし、この酒宴が混乱のうちに進行しただけでなく（表５の、１の③，２の①と②，３の①）、宴会の途中で金朝による対タタル戦への参加の要請もあったという内容が叙述されて（表５の３の②）。すなわち、この酒宴の惨状をみるかぎり、ホエルンの再々婚が関係者に祝福されていたかどうかは不明と言わざるを得ない。拙論でも論じたように、少なくともチンギスにとっては、この酒宴はあくまでも政争の道具にすぎなかった（藤井　2016：2－20）。

●C③の場合、

シキウルが、酒の注ぎ方の順序を誤ったとして打たれたときに、とうの昔に亡くなったイェスゲイやその兄のネクン・タイシに言及していることは、仮説Ⓒを受け入れると、ホエルンの再婚者であるムンリクとホエルンの元夫を対比的に提示したものと理解できる。つまり、宴会の混乱をムンリクは制御できなかったということを示している。

次の C④～C⑥の内容は、チンギスが王罕の息子センゲムの妹を長子に娶ってやるためにセンゲムのもとに向かう道中でムンリクの家に泊まったさいの内容に関するものであるので、３つを一緒に扱うことにする。

●C④〜C⑥の場合

ホエルンがムンリクと再々婚していたという仮説 C を取り入れると、チンギスが息子の婚姻のために動いているさなかに義父のところに寄ることは不思議ではないであろうーホエルンもムンリクと一緒にいたと考えられるのでー。そして、ムンリクが義理の息子チンギスのために忌憚のない忠告をしたことも、また、これに対して、チンギスも義父の忠告に耳を貸したことも不思議ではない。

次の C⑦は C⑧と同様に、ムンリク一家がチンギスの弟たちと争うほどに権力を握っていることについての疑問であるので、一緒に扱うことにしたい。

●C⑦と C⑧の場合

ホエルンがムンリクと再々婚したという仮説を受け入れると、ムンリクの息子たちが権力の中枢に近づけたという状況を理解することができるようになる。明示的にこの再々婚もまた叙述されないために、ムンリクの息子たちの政治舞台における登場は、チンギスに気に入られたシャーマンであるテブ・テンゲリの才能によるものだけのように見える。しかし、実際に力を持ったのはテブ・テンゲリだけではなく、彼を含む 7 人の兄弟であった。この背景には、ホエルンがムンリクと再々婚したということも関わっていると考えると納得がいく。

３．１．４．補足ー仮説Ⓒを補強するベルグテイの発言における“兄弟”ー

以上のように、仮説 C を受け入れると、明示的に「ジュルキン集団とチンギス陣営との懇親のための酒宴」が、非明示的にはホエルンの「結婚の祝宴」となる。この意味の変化とともに、もう一つ連動して変わる興味深い意味がある。それは、不可解な点としては挙げてはいなかったが、当該宴会においてベルグデイの発言のなかに現れる“兄弟”の意味である。これを述べることは、この仮説の妥当性をさらに増すものと考えられるので、まずこの部分を引用してみよう（栗林均・确精扎布 2001 :162－164, 小澤　1986 : 37－38）。

§ 131　tere qruim bidan-ača Belgütei ǰasa=at Činggis_qahan-nu aqta bari=ǰu bayyi=n bü=le’e. Jürkin-eče Büri_bökö tere qurim ǰasa=n bü=le’e. bidan-u kirü’ese-eče Qadagidai gü’ün čilbur qulaqu=qsan-ni qulaqai bari=ǰu’ui. Büri_bökö tere gü’ü-ben hoyimas=ču Belgütei nasu-da abaldu=run bara’un qanču-ban mültül=ǰü ničügün yabu=qu bü=le’e. teyin mültül=ü=ksen ničügün mürü in-u Büri_bökö üldü-er kangqas čabči=ǰu’u. Belgütei teyin ča[b]čiqda=ǰu bö=et ya’un-a ba ülü bolqa=n ülü senggere=n čisun čuburi’ul=ǰu yabu=quy-yi Činggis_qahan se’üdür-tür sa’u=ǰu qurim dotora-ča üǰe=ǰü qar=ču ire=ǰü ügüle=rün≪ker eyin kikde=n bü=le’e. bida.≫ kē=küi-tür Belgütei ügüle=rün ≪mer üdü’üi bü=le’e. min-u tula aqa de’ü-tür mawuqali=n bolulča=uǰai. bi ülü alǰa=qu bi ila’ari büy=yü. aqa de’ü-tür sayi iǰilidülče=n bü=küi-tür aqa bü=tügei. qorumut bayyi=.≫ ke’e=be.

…（略）…その宴を我々の側からベルグテイがしきり、チンギス可汗の去勢馬を捕まえて立っていた。ジュルキン側からブリ・ボコがその宴をしきっていた。我々の馬繋ぎ場からカダギン集団の者が馬の引き綱を盗んだ者を（盗人として）捕えた。ブリ・ボコはその人をかばって（争いとなり）ーベルグテイはいつもわたり合うときには己が右袖を脱いで肌を露わにしているのだったーそのように脱いだ露わなその肩をブリ・ボコは刀でグサッと一太刀浴びせた。ベルグテイはそのように斬られていたが何ともしないで、意に介せず血を滴らせているのをチンギス可汗は物陰に座って宴会の中から見て出てきて言うのに、「どのように、こうされているのか、我らは」と言うと、ベルグテイが言うのに、「傷はどうということないです。私のために**兄弟**で不仲にならないように。私は何でもない。私は大丈夫です。**兄弟**ではじめて親しみ合っているときに、兄さん、やめなさい。少し待ってください」と言った〔ただしゴシック体は筆者〕。

上記の「兄弟がはじめて親しみ合っているときに」における「兄弟」を拙論ではジュルキン集団の人々とチンギスの集団の人々との間の関係ととらえていたが、この宴会が婚姻の酒宴であるということから、この「兄弟」というのは、非明示的には、ムンリクの息子７人とチンギス・ハーンの兄弟たちがはじめて親睦をはかる機会だったと考えると納得がいく。ベルグデイは、無用な喧嘩により、婚姻の酒宴を台無しにすることを避けようとしたことになる。

この言動を見ると、ベルグテイは義母ホエルンの再々婚を支持していたと受け取れる。ただし、ベルグテイがホエルンの再々婚を支持していた背景には、幼少期に彼自身が同母兄弟のベクテルをチンギスに殺害されていることー明示的内容としてあるーや、それを契機にした、彼の長い非明示的なチンギスへの対抗心を見ると（藤井　2011a：31－39）、ホエルンの再々婚への支持は単なる人柄の良さではない可能性はある。ベルグテイの立場に立って見ると、これまでは父が同じでも、実母が異なり、その実母の地位がホエルン＞“ベルグテイの母”であるため（注３）、チンギス＞ベルグテイという地位に甘んじなければならなかったが、そのホエルンが再婚するとなると、実母の問題はなくなり、ベルグテイとチンギスは“イェスゲイの息子”として同等になるという考え方ができるようになるからである。

３．２．ホエルンの再々婚の破綻Ⓓの考察

３．２．１．破綻Ⓓに関連する明示的な流れの確認

最後の仮説Ⓓホエルンのムンリクとの再々婚は再び破綻することになったという仮説についての考察に入る。この仮説に関連する箇所は、2 箇所ある。ひとつは、巻 10§245 の後半部分である。この後半部分は、前述の表５の 9 の欄で示した内容の続きである。そして、もうひとつは、巻 10§246 の末尾に現われている叙述である（小澤 1989：202）。表７はこれを一覧にしたものである。ただし、表７は仮説Ⓓに関わる叙述箇所というよりも、その状況の説明として重要であるという観点からなされていることを断っておきたい。

表７　仮説Ⓓに関連する箇所

	内容	箇所
1	オドチギンはチンギスからテブ・テンゲリを処分してもよいという了解をとったので、3人の力士たちを待機させる。ムンリク父と７人の子供たちはまもなくやってくる。	巻 10 § 246
2	オドチギンはテブ・テンゲリの襟を掴んで、前日に悔い改めさせられたことに言及し勝負しようと言う。これにより、2人は組み合う。	〃
3	2人が組み合っているときに、テブ・テンゲリの帽子が炉のもとに落ち、これをムンリクが拾って匂いを嗅いだ後、懐に入れる。	〃
4	チンギスが、外に出て力士の力を競い合うように言う。	〃
5	オドチギンはテブ・テンゲリを引きずり出し、待機させていた３人の力士に手渡し、３人はテブ・テンゲリの背中をへし折り殺害する。	〃
6	オドチギンは再び中に入ってきて、テブ・テンゲリは勝負をしようとせず、わざと臥せたと言う。	〃
7	ムンリク父は何が起こったかを悟り落涙する。	〃
8	チンギスは外に出てテブ・テンゲリの亡骸を確認した後、その場所から移営する。	〃
9	テブ・テンゲリがなくなって、コンゴタン集団は勢力を失う（注４）。	巻 10 § 246

３．２．２．仮説Ⓓに関わる箇所での不可解な点

ここで、完全に不可解とはいえないながらも、やや不可解と思われる、表７の９に注目してみたい。たしかに、テブ・テンゲリの死は、彼がムンリクの７人の息子のうち最も有力な息子であったので、コンゴタン集団にとっては打撃であったろう。すなわち、テブ・テンゲリの死による政治的な勢力の衰えは必至であったろう。しかし、前述に引用したように、彼らの勢力が根こそぎなくなったかのような叙述の仕方には、少し違和感を覚える（注５）。

３．２．３．仮説Ⓓを取り入れた場合

３．２．２．で挙げた違和感は、仮説Ⓓを取り入れるというよりも、これまでの仮説を取り入れると必然的に導かれるものとなる。つまり、ホエルンがムンリクと再々婚していたと考えるならば、ことがテブ・テンゲリ一人の死だけで終わるものではないことが理解されるのである。

つまり、チンギスのテブ殺害をホエルンとムンリクの両者の立場から個別にみると、ホエルンの立場としては、義理の息子（テブ・テンゲリ）を実の息子（チンギス）が殺したということになり、ムンリクの立場からいえば、長年尽くしたにもかかわらず、義理の息子（チンギス）に実の息子（テブ・テンゲリ）を殺されたということになる。それゆえ、このテブ・テンゲリの死は、そのままホエルンとムンリクの再々婚の破たんをもたらしことは必至であろう。つまり、チンギスがムンリクの最有力の息子テブ・テンゲリを殺害させた時点で、仮説Ⓓすなわちホエルンの再々婚の破綻という事態に到り、ホエルンとムンリクの婚姻の破綻はコンゴタン集団全体が衰える原因とならざるをえなかったということになる。

４．結論とムンリクの存在が隠蔽された背景についての若干の考察

４．１．結論

本論では、秘史には明示的に描かれてはいないものの、ホエルン夫人がチンギスの父イェスゲイの死後、コンゴタン集団のムンリクという男性と再婚―破綻－再々婚―破綻という経緯を辿ったという仮説を提起した。そして最初の再婚を仮説Ⓐ、その破綻を仮説Ⓑ、再々婚を仮説Ⓒ、そしてその再々婚の破綻を仮説Ⓓとして分割して考察し、累積的な考察をおこなった。その考察においては、１）それぞれの仮説に関連する秘史の箇所の明示的流れの確認、２）それら明示的流れにおける不可解な点の指摘、そして３）それぞれの仮説を受け入れると不可解な点が解消されること、を提示した。重要なことは、これらの４つに分節されたホエルンの再婚にまつわる仮説は互いに連動して意味をなしているということである。そしてさらに、この４つに分節された仮説全体は、筆者のこれまでに提起してきた拙論とも整合的に理解されることも併せて指摘しておきたい。

４．２．ムンリクの存在が隠蔽された背景と今後の課題

以上の考察を終えた時点において、大きな疑問がひとつ浮上する。それは、なぜこれほどまでにムンリクがホエルンの再婚相手として隠蔽されたのかという点である。ホエルンはムンリクと再婚、再婚の解消、再々婚、そして再々婚の破綻という目まぐるしい経緯をたどっているにも関わらず、明示的叙述に一切このことが言及されていない。これは尋常のことではないであろう。それゆえ、この隠蔽は秘史の作者による意図的なものとみなさざるを得ない。この理由を考えてみると、当面のところ、次のような３つの理由が考えられる。

第１には、ホエルン夫人のムンリクとの再婚という問題が、イェスゲイ属民の帰属の問題を複雑にしたことと関係していることが考えられる。拙論で考察したように、チンギスの初期の闘いは、同族集団であったタイチウドに奪われたイェスゲイ属民の奪還にあったと考えられるからである（藤井　2014：39－54）（注６）。ただし、奪還が正当なものであるためには、チンギスがイェスゲイ属民の正当な後継者であることが必須である。もし、ホエルンがイェスゲイ死後すぐにムンリクと結婚したとすると、イェスゲイ属民はムンリクに引き継がれてもおかしくはない。秘史においては、チンギスの系譜を正統であり、またチンギスの行為を正当とする立場から明示的叙述が構成されているので、ムンリクの存在はホエルンの再婚相手としては好ましくなかったということが想像される。

実は、この属民の帰属問題はチンギスがテブ・テンゲリを殺害する契機となったオドチギンの事件にも関連していると考えられる。このオドチギンの事件は、チンギスのホエルンへの属民分与のやり方と複雑に絡んでいる。しかし、これについては詳細に立ち入らず、今後の課題としておきたい。

第２に、ケレイト集団の王罕とチンギスの関係が、明示的に疑似的な父子の関係であるよう

に描くために、ムンリクという義父の存在は表向き隠されねばならなかったと考えられることである。本論では、仮説として巻４§133 における宴会がホエルンとムンリクとの再々婚の酒宴であるという可能性を述べたが、この宴会の途中で金朝からの対タタル戦に出陣するようにという要請が届く。このときに、チンギスは「トオリル罕なる父よ、早く来てください（To'oril qan ečige öter iretügei）」と使者を送っており、ケレイト集団の王罕を“父”と明示的に呼んでいる（小澤　1986：58）。トオリル罕とは王罕のことであり、“王罕”は、この対タタル戦の後、金朝から授けられた称号である。チンギスが、母の再々婚にさいしても、ケレイト集団の王罕を“父”と呼んでいる背景には、ケレイト集団に当時チンギスがゆるやかに所属している格上集団であったからだと考えられる。これに対して、コンゴタン集団はチンギスにとっては格下集団でしかなかった。

しかし、この王罕の実の息子センゲムがチンギスを裏切った時点で、チンギスとケレイトの王罕との疑似的父子関係は明示的にも終わりを告げた。そして、興味深いことに、この王罕とセンゲムの裏切り行為を指摘したのが、ムンリクその人であった（表６の C④～C⑥を参照）。本論の議論においては触れなかったが、このときにムンリクはチンギスにとっての“父”となったといえるかもしれない。

第３に、ムンリクの存在が無視されたもうひとつの理由があると推測される。それは、秘史作者がホエルンに対して好意を持っていたことと関係している。秘史の明示的な叙述においては、ホエルンが肯定的に捉えられていることは明らかである。ここで指摘すべきことは、秘史において時に現れる“我々”という表現には作者の存在がうかがわれることについて論じたことがあるが、そのさいには作者がホエルンに捧げる４人の拾い子についての叙述を、作者の人的ネットワークを示すものとしてのみ捉えていた（藤井 2011b：51）。しかし、ホエルンの再婚相手がムンリクであるとすると、作者のムンリクに対する“嫉妬”が関係しているのではないかという新たな見方が出てくる。この見方をふまえると、２．１．１．で考察した、イェスゲイの遺言の奇妙さを理解できるようになる。イェスゲイの遺言で、彼の死後にホエルンやチンギスたちをムンリクに依頼したのかどうかということが曖昧に示されているのは、作者の“嫉妬”と関係があるということである。また、本論では論じなかったが、秘史に登場する拾い子のモチーフに新たな非明示的な解釈を付け加えることができる。つまり、拾い子というのは比喩的にホエルンと秘史作者のあいだの“疑似的子供”という意味をもつ（注７）。

この“嫉妬”の問題は看過できないように思われる。チンギスはテブ・テンゲリを殺害せずとも事を収めることもできたのではないかと思われるふしがあるからである。実際、本論で論じたテブ・テンゲリの殺害を考えるとき、チンギスがこの“嫉妬”という感情に突如襲われたらしきことが叙述されており、それこそが殺害の直接的な動機となったふしがある。それは、ムンリクの無意識のしぐさである。その場面は、次のように記されている（栗林均・确精扎布 2001：496－498，小澤　1989：173―174）。

§245　…Teb_tenggeri Otčikin-u esergü ǰaqa bari=ǰu barildu=ba. Te[b]_tenggeri-yin [-yin] maqalai barildu=qui-tur qulu[m]ta teri'ün-e una=ba. Mönglik_ečige maqalai in-u ab=ču hünüs=čü ebür-tür-iyen talbi=ba. Činggis_qahan ügüle=rün ≪qar=ču bökö güčü temečeldü=tkün. ≫ke'e=be.
…（略）…。テブ・テンゲリは、オドチギンに対し襟をつかんで組み合った。テブ・テンゲリの帽子が組み合ったときに炉の後ろに落ちた。ムンリク父は彼の帽子を取って匂いを嗅いで懐に入れた。チンギス・カハンが言うのに、「外に出て力士の力を競い合え」と言った。…（略）…。

上記のチンギスの「外に出て力士の力を競い合え」という発言はテブを暗殺してもよいという合図となっている。注意したいのは、その合図がなされるのが、ムンリクがテブの帽子の匂いを嗅ぐという行為についての叙述のすぐ後だということである。つまり、殺害の指令はムンリクのテブ・テンゲリへの愛情が無意識に示された直後だということである。しかも、このしぐさは予期されないものであったため、この後に続くテブ・テンゲリ殺害への合図がチンギスの一瞬の“嫉妬”という感情によって引き起こされた偶発的な出来事だった可能性を完全に否定することはできないのである。

注

１）この一連の拙稿は、筆者のモンゴル英雄叙事詩研究を基盤にするものである（藤井 2001，2003）。
２）abduction はアメリカの論理学者チャールズ・パース（Charles Sanders Peirce，1839～1914）が科学的論理的思考の方法・様式として提唱した演繹、帰納とは異なるもう一つの推論法のことである。
３）しかし、ホエルンと“ベルグテイの母”の関係は前者が後者よりも最初から優位に立っていたというわけではなかったことはすでに論じたとおりである（藤井 2011　21－41）。
４）原文は、Teb tenggeri-yi ügei bolγa'ad Qongqotan čirai ǰibturaǰu'ui-ǰe. とあり、直訳すると、「テブ・テンゲリがなくなって、コンゴタン集団は顔色が失せたのだった」となる。
５）村上正二氏によると、コンゴタン集団は史実としてはモンケ時代にもチンギス王家の巫者的な地位を占めていた（村上　1972：350－351）。
６）タイチウド集団についていったイェスゲイ属民たちはその後ジャムカ陣営に入り、ゆるやかにケレイト集団の支配下にあったことについては拙論ですでに述べたとおりである（藤井 2011a：55－56）。
７）秘史の作者とホエルンは同時代人であったと考えられる。秘史の作者の問題は複雑なものであるが、バアリン集団のナヤアという人物が少なくとも部分的に関わっていることについては拙稿で論じた（藤井　2013a：112－140, 2013c：55－67）。

引用文献

小澤重男 (1984)『元朝秘史全釈（上)』 風間書房

小澤重男 (1985)『元朝秘史全釈（中)』 風間書房

小澤重男 (1986)『元朝秘史全釈（下)』 風間書房

小澤重男 (1989)『元朝秘史全釈続攷（下)』 風間書房

栗林均・确精扎布（編）(2001)『元朝秘史』モンゴル語全単語・語尾索引』東北アジア研究センター叢書第 4 号

藤井麻湖（2001)『伝承の喪失と構造分析の行方』日本エディタースクール出版部

藤井麻湖（2003)『モンゴル英雄叙事詩の構造研究』風響社

藤井真湖（2009)「チンギス･カンをめぐる伝説の諸相－『チンギス･カンの伝説と歴史の地』という小冊子をもとに－」 『愛知淑徳大学現代社会研究科研究報告』第 10 号，pp.41－56

藤井真湖（2010a)「『元朝秘史』第 53 節〜第 68 節の有機的解釈の試み－“ベルグテイの母の出自の仮説をもとに－」『言語文化学会論集』第 34 号,pp.167－179

藤井真湖（2010b)「『元朝秘史』第 268 節におけるイェスイ妃に関する叙述－グルベルジン・ゴア妃の伝説からみた解釈－」『現代社会研究科研究報告』第 5 号,pp.41－56

藤井真湖（2011a)「『元朝秘史』におけるベクテル、ベルグテイ、“ベルグテイの母”の考察－“ベルグテイの母”の出身仮説をもとに－」『愛知淑徳大学現代社会研究科研究報告』6 号, pp.21－41

藤井真湖（2011b)「『元朝秘史』の地の文における “我々”表現に隠された意図―巻 3 第 110 節〜巻 11 第 263 節における一人称複数形についての考察―」『愛知淑徳大学現代社会研究科研究報告』7 号，pp.45－66

藤井真湖（2013a）Чингис Хаан ба Монголын Эзэнт Гүрэн:Түүх,Соёл,Өв (Олон Улцын Эрдэм Шинжилгээний Ⅴ Хурал 2012.07.24-26. Улаанбаатар хот),Редактор: Д.Шүрхүү,Б.Хүсэл,Иманиши Жүнко, Б.Сэржав, Орчуулгын редактор: Б. Сэржав, Хэвлэлд бэлтгэсэн: А. Сосорбурам, М. Болормаа, pp.112－140

藤井真湖（2013b)「『元朝秘史』におけるソルカン・シラとジェベ―gelbüre kö’ün＝「語り手」の仮説をもとに―」『愛知淑徳大学現代社会研究科研究報告』第 9 号,pp.17－34

藤井真湖（2013c)「『元朝秘史』の“モンゴル英湯叙事詩”的研究－現代に残る伝説から『元朝秘史』の物語分析へ－」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』第 15 号,pp.43－70

藤井真湖（2014a）「『元朝秘史』における anda 概念―王罕 - ジャムカ - チンギスの非明示的な三者関係を基に―」『愛知淑徳大学　現代社会研究科研究報告』第 10 号 ,pp.47－71.

藤井真湖（2014b）「元朝秘史』におけるボルテ夫人事件―繰り返し現れる“略奪”と“奪還”の諸事件のクライマックスとして―」『愛知淑徳大学大学院論文集―グローバルカルチャー・コミュニケーション研究科』第 6 号 ,pp.39－54.

藤井真湖（2015）「『元朝秘史』におけるアムバガイ事件：クトゥラ関与の仮説に基づいて」『愛知淑徳大学論集　グローバルカルチャー・コミュニケーション研究科篇』第 7 号，pp. 11－32

藤井真湖（2016）「『元朝秘史』におけるジュルキン集団を殲滅する非明示的論理：ブリ・ボコがチンギスの味方であったという仮説に基づいて」『愛知淑徳大学論集　グローバルカルチャー・コミュニケーション研究科篇』第 7 号，pp.　１－21

村上正二（1972）『モンゴル秘史　２』東洋文庫　平凡社